令和８年度山口県立大学 国際文化学部国際文化学科

学校推薦型選抜（地域貢献人材発掘枠）「小論文」問題用紙（持ち帰り）

【問】以下の文章を読み、次の問いに答えなさい。

科学哲学者のイアン・ハッキング（1936－2023）は、世界そのものが数学化したときに、世界は統計（確率）によって支配されることになったと書いている。

世界が自然法則によって支配されているとみなす決定論的な自然科学の展開のなかで統計学は発達し、社会および人間は統制可能で予測可能なものとなっていく。

アメリカのゴールデンアワーのテレビでは、(中略) 露骨な暴力シーンよりも、確率について語られることの方が多いのである。新聞をにぎわせる恐怖が、確率を使って繰り返し語られる。その可能性〔偶然・確率〕chance があるのは、メルトダウン、癌、強盗、地震、核の冬、エイズ、地球温暖化、その他である。恐怖の対象は（たぶん）これらではなくて、実は確率そのものなのである。(中略)

このような確率の支配は、世界そのものが数学化されたところでのみ起こり得たものである。我々は自然に対して、それがどんなものであり、またどんなものであるべきなのか、根底的には量的な感覚を持っている。これは当たり前のことではなく、いくつかのささいな理由もあってたまたまそうなったのである。

統計学が力を持つ現状は、自然と社会のリアリティの在処が具体的な出来事から、数字へと置き換わったことの象徴である。当初、統計は世界のリアリティについてのある程度の傾向を示す指標と見なされていたが、次第に統計が世界の法則そのものであると考えられるようになった。統計は事実に近い近似値ではなく事実そのものの位置を獲得するのだ。先のハッキングはいう。

たとえば 1988 年、日本が遂に世界一の長寿国になったことが注目を集めた。我々は、ちょうど日本企業が投資のための可処分資本 (注) を世界一蓄積しているのと同じくらいリアルに、平均寿命の伸びを日本人の生活や文化の現実的な姿と感じてしまうのである。

このように、「平均寿命」という単なる数字が日本を構成する事実そのものとなる。一人ひとりの日本人は早く亡くなることも長寿のこともあるのだから、「世界一の長寿国」というラベルが個人の余命を説明するわけではない。ましてや一人ひとりの高齢者が具体的にどのような暮らしをしているのかを示すわけではない。独居なのか、病院で寝たきりなのか、認知症なのか、もしかしたら元気なのか、同じ 90 歳でもさまざまだろう。

出典：村上靖彦『客観性の落とし穴』筑摩書房、2023 年、53 頁-55 頁。出題のため、原文を一部改変した。

（注）可処分資本：企業や個人が自由に使うことのできる資本の部分。つまり、自由に運用、投資、分配できる資本のことを指す。

問１．下線部は具体的に何を意味していますか。「世界一の長寿国」というラベルと個人の余命との関係性を踏まえて、200 字以内で記述してください。

問２．統計や確率によって世界を捉える利点と限界について、具体的な例を挙げて、あなたの考えを 400 字以内で記述してください。

令和８年度山口県立大学 国際文化学部国際文化学科
学校推薦型選抜（地域貢献人材発掘枠）「小論文」出題意図

出典

村上靖彦『客観性の落とし穴』筑摩書房、2023 年、53 頁-55 頁。出題のため、原文を一部改変した。

出題意図

村上靖彦は『客観性の落とし穴』の中で、現代社会が「数値やデータなどの客観的指標を過度に信頼するあまり、人間の経験や語りを軽視している」と指摘している。問では、客観性の利点・限界を理解しているか。主張に具体例を用い、論理的に展開しているかを求めている。つまり、客観性とは何のために必要であり、どのようなときにそれが“落とし穴”となるのかに、考えを巡らせることができるかどうかを測定することを目的としている。なお、問１では知識（文脈を理解するために必要な知識）、技能を問い、問２では思考力（具体例から解答に至るまでの一貫性）、判断力（適切な具体例の選択）を用いて、表現（説得力のある内容）できているかを問うものである。